©海事プレス社2026　禁無断転載

Daily Cargo

国際物流業界トピックス

搬送用両車両「レベル4自動運転」開始

■日本航空／福岡国際空港会社

日本航空と福岡国際空港会社は10月26日、福岡空港で搬送用車両（トーイングトラクター）の「自動運転レベル4」（特定条件下での完全無人運転）の運用を開始した。日本航空の自動運転レベル4導入は羽田空港、成田空港に次いで3空港目。首都圏以外の空港では初めてとなる。日本航空と福岡国際空港会社は「福岡空港内の国内貨物上屋と地上支援機材置場を結ぶ走行ライン約1.7キロにおける貨物の完全無人搬送を実現し、省人化と効率化を加速する」としている。



福岡空港で導入したトーイングトラクター（TLD Robotics製）
（写真提供＝日本航空）

昨今、グランドハンドリング業界の人材不足が深刻化する中で、福岡・九州の空の玄関口として国内外の航空需要が拡大している福岡空港では、空港業務における持続可能な運用体制の構築が課題になっている。

今回の取り組みは、国土交通省航空局が主導する「空港業務DX」実装推進の一環として、先端技術導入に積極的に取り組んできた日本航空と、空港運営を担う福岡国際空港会社が、空港内における交通ルールの改訂や走行ルート上の環境整備など、ハード・ソフト両面で密接に連携したことで運用開始に至った。

旅客・貨物ともに需要が拡大し、グランドハンドリングの担う役割がますます重要になる福岡空港で、早期に自動運転技術を確立させることは、運転操作に伴うヒューマンエラーに起因する事故リスクの抑制が期待できるほか、地方基幹空港における持続可能な運用体制構築に向けたモデルケースとなる。

両社は「今後、国土交通省航空局の支援のもとで、同運用を検討している全日本空輸とも協調することで、業界全体の課題解決と空港全体の生産性向上へ貢献していく。事業者間の垣根を越えた連携を強化し、高度なDX実装技術の普及と安心・安全な空港インフラづくりを推進する」としている。